

6.6

第2回気楽にクラシック 〜ヨーロッパ音楽紀行〜
〈金〉東京オペラシティ コンサートホール／20時開演（19時30分から解説）
The 2nd “Enjoy classic!” Series Friday, 6th June, 20:00 (Pre-concert talks from 19:30) / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 **パオロ・カリニャーニ** 6ページ
Conductor PAOLO CARIGNANI

解説 **加藤浩子** 13ページ
Lecturer HIROKO KATO

ナビゲーター **中井美穂** 13ページ
Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

《陽光あふれる歌の国、イタリア》

ヴェルディ 歌劇〈運命の力〉序曲 〔約8分〕 14ページ
VERDI / “La forza del destino” Overture

マスカーニ 歌劇〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉間奏曲 〔約3分〕
MASCAGNI / “Cavalleria rusticana” Intermezzo

ベッリーニ 歌劇〈ノルマ〉序曲 〔約6分〕
BELLINI / “Norma” Overture

レオンカヴァッロ 歌劇〈道化師〉間奏曲 〔約4分〕
LEONCAVALLO / “I pagliacci” Intermezzo

メンデルスゾーン 交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉 〔約27分〕
MENDELSSOHN / Symphony No. 4 in A major, op. 90 “Italian”
I. Allegro vivace
II. Andante con moto
III. Con moto moderato
IV. Saltarello: Presto

※当公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

【監修】小林研一郎（特別客演指揮者）

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【後援】イタリア大使館

6.12

第538回 定期演奏会
〈木〉サントリーホール／19時開演
The 538th Subscription Concert
Thursday, 12th June, 19:00 / Suntory Hall

指揮 **パオロ・カリニャーニ** 6ページ
Conductor PAOLO CARIGNANI

ソプラノ **並河寿美** 9ページ
Soprano HISAMI NAMIKAWA

メゾ・ソプラノ **清水華澄** 9ページ
Mezzo-Soprano KASUMI SHIMIZU

テノール **岡田尚之** 10ページ
Tenor NAOYUKI OKADA

バス **妻屋秀和** 10ページ
Bass HIDEKAZU TSUMAYA

合唱 **新国立劇場合唱団** 11ページ
Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

合唱指揮 **三澤洋史** 11ページ
Chorusmaster HIROFUMI MISAWA

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ヴェルディ レクイエム 〔約84分〕 16ページ
VERDI / Requiem
I. REQUIEM
II. DIES IRÆ
1) Dies iræ
2) Tuba mirum
3) Liber scriptus
4) Quid sum miser
5) Rex tremendæ
6) Recordare
7) Ingemisco
8) Confutatis
9) Lacrimosa
III. OFFERTORIO
IV. SANCTUS
V. AGNUS DEI
VI. LUX ÆTERNA
VII. LIBERA ME

※当公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
【協力】アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

6.20

第572回サントリーホール名曲シリーズ
〈金〉サントリーホール／19時開演

The 572nd Suntory Hall Popular Series
Friday, 20th June, 19:00 / Suntory Hall

6.22

第167回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈日〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

The 167th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Sunday, 22nd June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 円光寺雅彦 7ページ
Conductor MASAHIKO ENKOJI

ピアノ ヴアレリー・アフアナシエフ 12ページ
Piano VALERY AFANASSIEV

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

モーツァルト 歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲 [約6分] 22ページ
MOZART / “Die Entführung aus dem Serail” Overture

モーツァルト ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 K. 271 〈ジュノム〉 [約32分] 23ページ
MOZART / Piano Concerto No. 9 in E flat major, K. 271 “Jeunehomme”
I . Allegro
II . Andantino
III . Rondeau. Presto

[休憩 Intermission]

モーツァルト ピアノ協奏曲 第27番 変ロ長調 K. 595 [約32分] 24ページ
MOZART / Piano Concerto No. 27 in B flat major, K. 595
I . Allegro
II . Larghetto
III . Allegro

モーツァルト 交響曲 第31番 ニ長調 K. 297 〈パリ〉 [約17分] 25ページ
MOZART / Symphony No. 31 in D major, K. 297 “Paris”
I . Allegro assai
II . Andantino
III . Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[事業提携] 東京芸術劇場（6/22）

6.30

非破壊検査 Presents 読売日本交響楽団 大阪定期演奏会
〈月〉ザ・シンフォニーホール（大阪）／19時開演

Subscription Concert in Osaka, presented by Non-Destructive Inspection CO., Ltd
Monday, 30th June, 19:00 / The Symphony Hall in Osaka

指揮 ユージン・ツィガーン 8ページ
Conductor EUGENE TZIGANE

ヴァイオリン キャロライン・ゲールディング 12ページ
Violin CAROLINE GOULDING

コンサートマスター 長原幸太（ゲスト）
Guest Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 [約4分] 26ページ
MOZART / “Le nozze di Figaro” Overture

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] 27ページ
MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64
I . Allegro molto appassionato
II . Andante
III . Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

[休憩 Intermission]

マーラー 交響曲 第1番 ニ長調 〈巨人〉 [約53分] 28ページ
MAHLER / Symphony No. 1 in D major “Titan”
I . Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich
II . Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
III . Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
IV . Stürmisch bewegt

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[特別協賛] 非破壊検査株式会社
[協力] ザ・シンフォニーホール

世界の一流歌劇場を席卷
歌心あふれるマエストロ

パオロ・ カリニャーニ

Paolo Carignani

- ◇ 6月6日 気楽にクラシック
- ◇ 6月12日 定期演奏会



©読響

1961年ミラノ生まれ。生地のジュゼッペ・ヴェルディ音楽院でオルガン、ピアノ、作曲、そしてアルチェオ・ガリエラ氏のもとで指揮を学んだ。

99年から2008年までフランクフルト歌劇場音楽総監督とフランクフルト・ムゼウム管の音楽監督を務めたほか、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座（バステューユ）、バイエルン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、サンフランシスコ歌劇場、リセウ歌劇場（バルセロナ）やイタリアの数多くのオペラハウスに登場し、イタリア・オペラの指揮での圧倒的な力量で絶大な評価を獲得している。

オーケストラの指揮では、ミュンヘン・フィル、デトロイト響、北ドイツ放送響、ケルンWDR（西ドイツ放送）響、ウィーン放送響、イタリア国立放送響などと共演、また、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭、ラインガウ音楽祭、スポレート音楽祭、グラインドボーン音楽祭、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル（ペーザロ）などでも活躍している。

読響とは06年7月に初めて共演し、イタリア音楽のみならず、〈幻想交響曲〉や、新ウィーン楽派とモーツァルトを組み合わせたプログラムなどでその手腕を発揮した。翌07年7月には、急病のフリーベック・デ・ブルゴス（読響名誉指揮者）に代わり読響の指揮台に立ち、〈展覧会の絵〉や〈春の祭典〉などで力強い演奏を披露するとともに、ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番で辻井伸行氏とも共演を果たした。その後も、09年7月には〈惑星〉や〈ローマ3部作〉など、11年6月にはベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番（辻井氏と再共演）やモーツァルトの〈レクイエム〉など、12年7月にはサン＝サーンスの交響曲第3番〈オルガン付き〉などを指揮し、いずれも絶賛を博した。

伝統あるウィーンの音楽を受け継ぎ
モーツァルトを得意とする名匠

円光寺雅彦

Masahiko Enkoji

- ◇ 6月20日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇ 6月22日 東京芸術劇場マチネーシリーズ



©Kosaku Nakagawa-Nagoya Philharmonic

1954年東京生まれ。桐朋学園大学指揮科にて指揮を斎藤秀雄、ピアノを井口愛子の両氏に師事。卒業後、ウィーン国立音楽大学へ留学し、オトマール・スウィトナー氏に師事。帰国後は81年から86年まで東京フィル副指揮者を、86年から91年まで同フィル指揮者を務めた。89年には仙台フィル常任指揮者に就任、99年に退任するまで、オーケストラの飛躍的な発展に多大な功績を残した。98年から2001年までは札幌響正指揮者を務め、00年の東京公演などが高く評価された。11年からは名古屋フィル正指揮者を務めている。

客演指揮者としてもN響や大阪フィルなど、国内の各オーケストラと共演を重ね、着実に活動範囲を広げている。海外では92年にプラハ響の定期演奏会に客演したのを始め、94年にはBBCウェールズ響、95年にはドミトリー・キタエンコの招きによりノルウェーのベルゲン・フィル、98年にはフランスのブルターニュ管に客演し、その深い音楽性と的確な指揮で、各地の聴衆を魅了している。また、NHKの「名曲アルバム」や「おい、ニッポン」「あなたが主役 音楽のある街で」といった番組に定期的に出演するなど、幅広い活動を展開している。

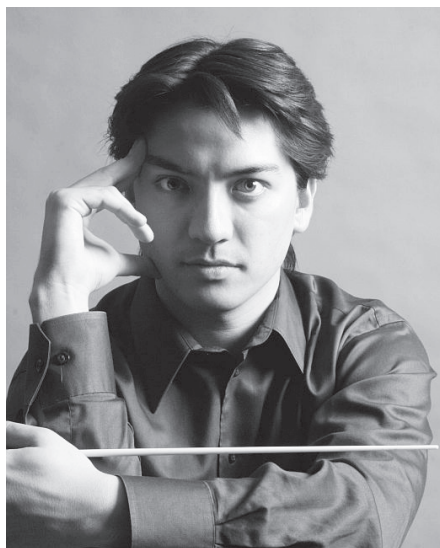
読響とは、86年以降《名曲シリーズ》や親子向けコンサート、地方公演など、数多くのコンサートで共演を重ねており、夏恒例の《サマーフェスティバル》「三大交響曲」「三大協奏曲」では最多出演記録を保持している。また、近年は読売新聞社主催の《シネマ・ミーツ・シンフォニー》《ミュージカル・ミーツ・シンフォニー》公演でも活躍している。天皇、皇后両陛下のご臨席のもと、12年4月に行われた《第62回伊勢神宮式年遷宮奉祝演奏会》では、演奏後に両陛下から熱心な拍手を送られた。

人気急上昇中の注目株
欧米で幅広く活躍する俊英

ユージン・ ツィガーン

Eugene Tzigane

◇ 6月30日 大阪定期演奏会



©Peter Schaaf

1981年、アメリカ人と日本人の両親のもとに生まれる。ジュリアード音楽院でブルーノ・ワルター記念奨学金を得てジェームズ・デブリーストに、ストックホルム音楽大学でフランツ・ベルワルド記念奨学金を得てヨルマ・パヌラにそれぞれ師事。アラン・ギルバート、ダニエル・ハーディング、マイケル・ティルソン・トーマス、ユッカ＝ペッカ・サラステのマスタークラスも受講した。

2007年のフィテルベルク国際指揮者コンクール（カトヴィツェ）で第1位、同年のマタチッチ国際指揮者コンクール（ザグレブ）で第2位、08年のゲオルク・ショルティ国際指揮者コンクール（フランクフルト）で第2位にそれぞれ入賞。現在は北西ドイツ・フィル（ヘアフォルト）の首席指揮者とポメラニア・フィル（ポーランド・ブィドゴシュチュ）の首席客演指揮者として活躍している。北西ドイツ・フィルとは、40回以上に及ぶ定期公演に加え、イタリア、スペイン、スイスを回るヨーロッパ・ツアーにも同行、さらにアメリカ・ツアーでは通算13回の公演を指揮し、各地で絶賛を博した。

客演指揮者としてはこれまでにhr（フランクフルト放送）響、ベルリン・ドイツ響、デュイスブルク・フィル、リンツ・ブルックナー管、ネーデルラント・フィル、ノルウェー放送響、アイルランド国立響、タンペレ・フィル、ラハティ響、バーゼル響、インディアナポリス響、オレゴン響、ニュージャージー響、東京都響など、世界中のオーケストラと共演している。ベルリン・ドイツ響とはイタリア・ツアーでも共演し、注目を集めた。

また、オペラの分野では、09年にバイエルン国立歌劇場のオペラ・スタジオ（研修生公演）での〈コジ・ファン・トゥッテ〉（新演出）を指揮してデビュー。12年にはフランクフルト歌劇場で〈こうもり〉を指揮した。

読響とは今回が初共演。

劇的な表現で聴衆を魅了する
ドラマティック・ソプラノ

並河寿美

Soprano
Hisami Namikawa

大阪音楽大学卒業。同専攻科、同大学院オペラ研究室修了。

2005年〈おさんー心中天網島より〉のタイトルロールで新国立劇場デビューを飾る。06年に佐渡裕指揮の兵庫県立芸術文化センター〈蝶々夫人〉タイトルロールで高い評価を得、近年では〈アイダ〉〈トスカ〉〈トゥーランドット〉（いずれもタイトルロール）、〈タンホイザー〉ヴェーヌスなどで好評を博し、公演の成功に大きく寄与した。またコンサートでも、Z.メータ指揮N響〈第九〉や大野和士指揮〈復活〉等で信頼に応える歌唱を披露している。

平成9年度神戸・灘ライオンズクラブ音楽賞、平成18年度音楽クリティック・クラブ賞、平成24年度神戸市文化奨励賞等多数受賞。大阪音楽大学准教授。二期会会員。

◇ 6月12日 定期演奏会



幅広い役柄で絶賛を博し
進境著しいメゾ・ソプラノ

清水華澄

Mezzo-Soprano
Kasumi Shimizu

国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て、文化庁在外派遣研修員として渡伊。留学中にはバーデン市（オーストリア）からたびたび招聘され〈こうもり〉オルロフスキー等に出演。

2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカで二期会デビューを飾り、08年小澤征爾指揮新日本フィル〈ファウストの劫罰〉マルガレーテでは確かな歌唱力を披露。近年では二期会〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉サントウツツア、新国立劇場及び中国国家大劇院（北京）での〈アイダ〉アムネリスなど着実にメゾの大役で評価を高め、本年二期会〈ドン・カルロ〉では自身の念願であったエボリ公女を演じ、見事な演唱で絶賛された。第6回カルロス・ゴメス国際コンクール（イタリア）第2位入賞。二期会会員。

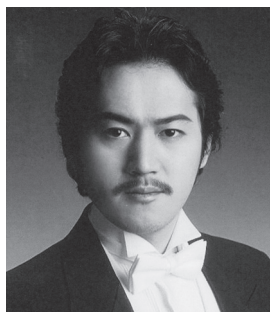
◇ 6月12日 定期演奏会



本場イタリアでも高評価
新進気鋭のテノール

岡田尚之

Tenor
Naoyuki Okada



東京藝術大学卒業。同大学院、及び新国立劇場オペラ研修所修了後、渡欧。カルロ・フェリーチェ劇場（イタリア）における全世界から700人余りが参加したオーディションにてテノールで唯一の合格者となり、〈魔笛〉僧侶及び武士、〈ジャンニ・スキッキ〉リヌッチョを歌い国際デビュー。同劇場では現代作品を含む5演目30公演に出演。国内でも、びわ湖ホール・神奈川県民ホール〈タンホイザー〉ヴァルター、びわ湖ホール〈死の都〉ガストン、二期会〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉トゥリッドゥ等で高い評価を受けている。

第3回マダム・バタフライ国際コンクールin長崎第2位、第14回ジュゼッペ・ディ・ステファノ国際声楽コンクール特別審査員賞、第21回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

◇6月12日 定期演奏会

日本人離れした堂々たる風格
国内外で引く手数多の本格派バス

妻屋秀和

Bass
Hidekazu Tsumaya



大阪府出身。東京藝術大学を卒業後、同大学院オペラ科修了。1989年イタリア声楽コンクール・ミラノ部門金賞、91年日本音楽コンクール第3位、同年日本声楽コンクール第2位などを受賞。92年から安田生命クォリティー・オブ・ライフ文化財団第1回奨学生としてイタリア・ミラノに留学。94年～2001年、ドイツ・ライプツィヒ歌劇場専属契約歌手、02～11年、ワイマールのドイツ国民劇場専属歌手として主にドイツで活躍、ブレゲンツ湖上音楽祭、クラーゲンフルト市立歌劇場、ライン・ドイツ・オペラ、ミュンスター市立劇場、ベルリン州立歌劇場などにも客演した。国内では新国立劇場や藤原歌劇団の数多くの舞台上で活躍している。96年、ジローオペラ賞受賞。

藤原歌劇団団員。ライプツィヒ在住。

◇6月12日 定期演奏会

ドラマティックに、かつ繊細に
ヴェルディを知り尽くした合唱団

新国立劇場合唱団

New National Theatre Chorus

オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンス、演劇という、現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として1997年10月に開場した新国立劇場で、オペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。100名を超えるメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家、スタッフはもとより、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉（11年9月）、ラヴェル〈ダフニスとクロエ〉（12年10月）、ベートーヴェン〈第九〉（12年12月）、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉（13年9月）では常任指揮者カンブルランのもとで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇6月12日 定期演奏会

合唱団から最高のハーモニーを引き出す
卓越した手腕のコーラスマスター

三澤洋史

Chorusmaster
Hirofumi Misawa



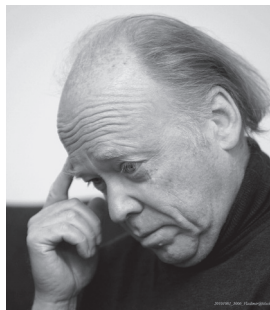
国立音楽大学声楽科卒業後、指揮に転向。ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。1999～2003年、バイロイト祝祭合唱団指導スタッフとして音楽祭に参加。01年より新国立劇場合唱団指揮者に就任。新国立劇場で行われるほぼすべての公演で合唱指揮者を務めている。また、バッハに深く傾倒しており、06年に東京バロック・スコラーズを結成。モテット集のCDは『レコード芸術』誌で準特選に選ばれた。11年には、文化庁在外研修員としてイタリア・ミラノに3か月間滞在。スカラ座合唱団の音楽作りを学び、イタリア・オペラへの造詣をいっそう深めた。声楽を伴う数多くの管弦楽作品に精通し、オペラ、オラトリオの指揮者として幅広く活動している。日本顕彰会より社会貢献者賞受賞。上毛新聞社より上毛音楽賞受賞。日本ワーグナー協会会員。

◇6月12日 定期演奏会

圧倒的なカリスマ性を持ち
聴衆を魅了する現代最高の鬼才

ヴァレリー・ アフアナシエフ

Piano
Valery Afanassiev



1947年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院でヤーコブ・ザークとエミール・ギレリスに師事。ライプツィヒ・バッハ国際コンクール、エリザベート王妃国際コンクール優勝。74年にベルギーへ亡命。以後、欧米各地でリサイタルを行うほか、ベルリン・フィルなどの著名なオーケストラと共演を重ねてきた。83年にギドン・クレーメルとの共演者として初来日。その後も来日を重ね、独自の世界観をピアノで表現。その模様は、NHK教育テレビで放映され話題を呼ぶなど、日本でも幅広い熱烈なファンを獲得している。これまでに30枚以上のCDをリリースし、レコード・アカデミー賞などを受賞。その独自の音楽は常に論議を呼び、音楽界に大きな刺激をもたらしている。一方、文学者としての顔も持ち、小説や詩集、エッセイなどが出版されている。読響とは今回が初共演。

◇ 6月20日 サントリーホール名曲シリーズ ◇ 6月22日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

才色兼備の若手ヴァイオリニスト
名器ストラディヴァリウスの音色にも期待

キャロライン・ ゲールディング

Violin
Caroline Goulding



アメリカ出身のヴァイオリニスト。2009年にヤング・コンサート・アーティスト国際オーディションに合格、11年にはエイヴリー・フィッシャー奨学金を授与された。13歳でデビュー以来、ソリストとして北米の多くのメジャー・オーケストラと共演、またカーネギー・ホール、リンカーン・センター、ケネディ・センター、北京の紫禁城コンサートホールなどでリサイタルを開催、近年はドイツを中心にヨーロッパや日本でも活躍の場を広げている。

また、テラーク・レーベルからのデビュー盤がグラミー賞にノミネートされるなど、10代から数多くのレコーディングをリリースして注目を集めている。

読響とは今回が初共演。使用楽器は、ジョナサン・モールズ氏から貸与されているストラディヴァリウス「ジェネラル・キッド」(1720年製)。

◇ 6月30日 大阪定期演奏会

プログラムノート

PROGRAM NOTES

柴田克彦

しばた かつひこ・音楽ライター

気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～

第2回
《陽光あふれる歌の国、イタリア》

6.6 〈金〉

ヨーロッパの国々を巡る本シリーズ、第2回のテーマは陽光あふれる歌の国イタリアです。イタリアといえばオペラ！ということで、前半は19世紀ロマン派のオペラ作品。今回の4作はみな^{せいさん}あふ^{あふ}凄惨な悲劇ながらも、音楽は甘美な旋律に溢れている点が、やはりこの国ならではの魅力です。後半は逆に、北ドイツ人メンデルスゾーンが描いた〈イタリア〉交響曲。構築感とカンタービレを同時に堪能できる嬉しい1曲です。

指揮は、世界の一流歌劇場から引く手あまたのキャリア二。読響にも再三客演して相性も抜群の本場の名匠が、^{はつらつ}澀^た刺としたリズムと豊かな歌心を湛えたドラマティックな表現を聴かせてくれます。そしてもちろん音楽評論家の加藤浩子と中井美穂による解説・トークもお楽しみに！

解説

加藤 浩子 Hiroko Kato



音楽評論家。慶応義塾大学、同大学院修了(音楽学専攻)。大学院在学中、オーストリア政府給費留学生としてインスブルック大学留学。パッハとイタリア・オペラをテーマに、執筆、講演、オペラ&音楽ツアーの企画同行など多彩に活動。著書に『今夜はオペラ!』『ようこそオペラ!』(春秋社)、『黄金の翼=ジュゼッペ・ヴェルディ』(東京書籍)、『ヴェルディ』(平凡社新書)、他共著多数。

ナビゲーター

中井 美穂 Miho Nakai



アナウンサー。ロサンゼルス生まれ。1987年～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。現在、「鶴瓶のスジナシ」(CBC/TBS)、「タカラヅカ・カフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディア・パートナー」(FM東京)にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読もしている。2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。



イタリア・オペラ最大の作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）の歌劇〈運命の力〉序曲で、力強く開幕します。〈運命の力〉は、ロシアのペテルブルクの帝室歌劇場（現・マリインスキー劇場）の依頼で書かれた中期の名作。誤って恋人の父を殺した主人公が運命に翻弄される悲劇です。ヴェルディは、1869年ミラノ・スカラ座でのイタリア初演にあたり、当初の前奏曲を大幅に改めて、この序曲を作りました。曲は、金管の強奏後に弦楽器で出される「運命のテーマ」など、本編の旋律を複数用いて展開されるシンフォニックな音楽。管楽器のソロやブラスの華麗な響きを楽しめる、人気の一曲です。

代わってしみじみとした音楽を。ピエトロ・マスカーニ（1863～1945）の歌劇〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉間奏曲です。本作は、神話や伝説ではなく現実の事件を題材にした「ヴェリズモ・オペラ」の先駆的な作品。シチリア島を舞台に4人が絡む恋の悲劇で、タイトルは「田舎の騎士道」を意味しています。愛憎渦巻く舞台を沈静化させるかのように奏される間奏曲は、弦楽器やハープを中心とした清らかな逸品。これも単独で人気の作品です。

再び劇的な音楽、イタリア・ロマン派オペラの開拓者ヴィンツェンツォ・ベッ

リーニ（1801～35）の歌劇〈ノルマ〉序曲です。本作は、ドルイド教の呪僧長ノルマを軸にした三角関係の悲劇。美しくも迫力に富んだ、「ベル・カント・オペラ（声の魅力を重視したオペラ）」の最高傑作です。序曲は、最強音で厳粛に始まり、素朴な旋律が続いた後、行進曲調に移行。軽快な旋律をまじえながら劇的な展開を遂げます。

オペラものの最後は、マスカーニと並ぶヴェリズモ・オペラの創始者ルッジェーロ・レオンカヴァッロ（1858～1919）の歌劇〈道化師〉間奏曲。本作は、旅芝居一座の座長が、女優の妻の浮気を知り、芝居の中で殺してしまう……といった悲劇で、規模や内容から、しばしば〈カヴァレリア〜〉との組み合わせで上演されています。間奏曲は、第2幕の劇中劇の前に演奏される、ドラマティックで感動的な音楽。

ここからは、ドイツ初期ロマン派の代表格フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）の交響曲第4番〈イタリア〉をたっぷりと。1830年、メンデルスゾーンはイタリア各地を訪れ、同年11月から翌年4月までローマに滞在しました。当地の南国的な空気や謝肉祭などの風物に刺激を受けた彼は、滞在中に同曲の作曲を始め、1833年ベルリンに戻って完成。しかし初演後さらに改訂

を重ねて、死後の1851年に出版されたため、交響曲第2、3番よりも前の作ながら第4番となりました。

曲には、ハンブルクに生まれ、ベルリンで暮らす北ドイツ人メンデルスゾーンが受けた陽光輝くイタリアのイメージが、簡潔・明快に反映されています。旋律美やリズム感も秀逸。中でもローマの民俗舞曲サルタレロを用いた終楽章は、心が躍ること間違いなしです。ただこの曲、長調で始まり短調で終わるという交響曲には珍しい構成。それによって明るさに深みが加わったとも

いえそうです。

第1楽章（アレグロ・ヴィヴァーチェ）は、弾けるような開始と流れるような旋律が、まさにイタリアを感じさせます。第2楽章（アンダンテ・コン・モート）は、宗教行事の印象を反映したといわれるセンチメンタルな音楽、第3楽章（コン・モート・モデラート）は、憂いを帯びたメヌエット風の楽章です。第4楽章（サルタレロ、プレスト）は、躍動感満点に畳み込む熱狂のフィナーレ。これが短調で書かれているのは意外です。

ヴェルディ 歌劇〈運命の力〉序曲

作曲:1869年/初演:1869年2月27日、ミラノ/演奏時間:約8分

マスカーニ 歌劇〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉間奏曲

作曲:1888～90年/初演:1890年5月17日、ローマ/演奏時間:約3分

ベッリーニ 歌劇〈ノルマ〉序曲

作曲:1831年/初演:1831年12月26日、ミラノ/演奏時間:約6分

レオンカヴァッロ 歌劇〈道化師〉間奏曲

作曲:1892年/初演:1892年5月21日、ミラノ/演奏時間:約4分

メンデルスゾーン 交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉

作曲:1831～33年/初演:1833年5月13日、ロンドン/演奏時間:約27分

第538回
定期演奏会

6.12 (木)

ヴェルディ
レクイエム

作曲：1873年10月～1874年3月／初演：1874年5月22日、ミラノ（指揮：ヴェルディ）／演奏時間：約84分

新しい時代を生み出した、イタリアのふたりの「偉人」へのオマージュ

生涯をひたすらオペラの作曲に捧げてきたジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）と宗教、すなわちキリスト教（カトリック）との関係は複雑である。その若き日には、神の恩寵をにわかには信じられぬであろうほどの災厄が続いた。1840年、二番目のオペラ〈一日だけの王様〉作曲までに、最初の妻マルゲリータと子どもたちをすべて失い、悲嘆のどん底に落とされる。その後、新たな伴侶となるジュゼッピーナ・ストレッポーニとは同棲期間が長く続き、「神に祝福されぬ」二人の生活は、結婚生活に対して保守的なイタリア、とりわけ二人が住んでいた田舎町サンタガータでは格好のキャンダルとなった。

1850年代前半に初演され、ヴェルディの名声を不動のものとした〈リゴレット〉〈トロヴァトーレ〉〈椿姫〉は、いずれも社会におけるアウトサイダーを主人公

としている。彼らは「キリスト教社会」からはじき出された人物でもあった。新しい時代を迎えようとするイタリア社会において、その流れを抑えようとする教会とその聖職者に対し、ヴェルディは常に強い反感を抱き続ける。

そんな男にとって、純粋な宗教曲には食指が動かなかったとしても、亡き人の偉大な思い出を偲び、追悼の気持ちを捧げる、という意味での鎮魂歌、〈レクイエム〉の作曲ならば、宗教的な違和感は少なかったのだろう。1868年11月にパリで暮らしていたジョアキーノ・ロッシーニが亡くなると、ヴェルディはこれをイタリアの作曲家がひとつにまとまる契機ととらえ、自らを含む13人の作曲家に〈レクイエム〉の各部分の作曲を委嘱する。しかし、準備委員会は必要な基金を集めることができず、歌手の選定なども後手に回り、結局は頓挫してしまう。

イタリアの芸術に多大なる貢献を果たした偉人に捧げるための〈レクイエム〉という発想は、この5年後、もうひとりの偉人、アレッサンドロ・マンゾーニの死とともに蘇る。マンゾーニはミラノの伯爵家の生まれであり、主著たる歴史小説『いいなずけ』によって、ドイツのゲーテと比肩される存在となった。彼の功績として、トスカナ語を中心とする近代の標準イタリア語を作り上げ、国民国家の形成に言語・文学方面で貢献したことも見逃せない。ヴェルディは『いいなずけ』を「真実を描いた物語」とであると激賞し、歴史上の偉人に匹敵する人物と見なしていた。

1873年5月にマンゾーニが亡くなると、ヴェルディはその一周忌に〈レクイエム〉を作曲する計画を立て、ミラノ市にも上演費用を負担させた。作曲は順調に進められ、無事一周忌に初演。〈アイーダ〉の成功を導き、公私ともに親密な関係にあったソプラノ歌手テレザ・ストルツや、スカラ座のオーケストラ、合唱団の協力を得て、大きな名声を勝ち取った。

ロッシーニのために書いた、終曲にあたる“リベラ・メ（我を許し給え）”を、

新しいレクイエムのために復活させるにあたり、ヴェルディはその多くを改訂した。特筆すべきは、五つの部分に分かれる“リベラ・メ”曲の2番目におかれた、だれもが一度聴いたら忘れられないほどの力強さを漲らせた“ディエス・イレ（怒りの日）”を、加筆した上で全曲の核として第2曲の3箇所を使い、作品の劇性を高めたことにある。

第2曲冒頭、そして長大な同曲の最後に置かれた“ラクリモーザ（涙の日）”の前にもこの楽節は再び置かれ、直後の静謐な音楽との対比がより一層際立たされている。この“ラクリモーザ”には、パリ初演では大きな成功を収めることができなかった歌劇〈ドン・カルロス〉（フランス語版）において、親友ロドリゲを失い悲嘆に暮れるドン・カルロス、そして対立する父王フィリップとの絶望的な相克を描いた場面の音楽が転用された。これもまた、死者に対する生者の絶望と苦しみ我真実味を与えるために置かれたものだろう。最後の“リベラ・メ”が、慈しみを感じさせるソプラノで歌われ、温かに終わるのも、死者に対する生者の哀しみと慰めの吐露であるにちがいない。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓）、バンダ（トランペット4）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱

プログラムノーツ
PROGRAM NOTES

飯尾洋一
いいお よういち・音楽ライター

第572回
サントリーホール名曲シリーズ
6.20〈金〉

第167回
東京芸術劇場マチネーシリーズ
6.22〈日〉

モーツァルト
歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲

作曲:1781～82年／初演:1782年7月16日、ブルク劇場（ウィーン）／演奏時間：約6分

エキゾチックなトルコ趣味にあふれた軽快な序曲

故郷ザルツブルクの宮廷楽団に辞表を提出し、ミュンヘン、マンハイム、パリを巡って就職口を探したヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、定職を得られないまま、1781年よりウィーンに定住する。結果的にフリーランスの音楽家としてこの地で名声を獲得することになるが、当初、モーツァルトはいずれウィーンでなんらかのポストを得たいと望んでいた。そのためには皇帝ヨーゼフ2世へのアピールが必要となる。ヨーゼフ2世に認められるための最短ルートは、宮廷劇場のためにオペラを作曲して成功を得ること。そのチャンスはすぐに到来した。

当時ヨーゼフ2世は、イタリア・オペラが隆盛を誇ったウィーンにドイツ・オ

ペラを振興させようと考え、ブルク劇場をドイツ語オペラと演劇のための上演拠点として整備した。この劇場で上演するためのドイツ語オペラとして作曲を委嘱されたのが〈後宮からの誘拐〉である。

舞台はトルコの太守の宮殿。スペインの貴族ベルモンテが後宮（ハーレム）にとらわれた恋人コンスタンツェを救い出そうとやってくる。ベルモンテらの救出作戦は失敗に終わり、太守にとられるが、最後は太守の慈悲の心によってめでたく釈放される。初演は大成功を収めた。

軽快な序曲ではシンバル、トライアングル、大太鼓が打ち鳴らされて、トルコの軍楽隊を連想させる。ピッコロが華々しく活躍し、賑やかさを一段と増している。

楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

モーツァルト
ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 K. 271 〈ジュノム〉

作曲:1777年、ザルツブルク／初演:不明／演奏時間:約32分

ザルツブルク時代のモーツァルトによる屈指の傑作

ピアノ協奏曲第9番〈ジュノム〉は1777年、21歳になったモーツァルトによって作曲された。ザルツブルク時代に書かれた協奏曲のなかでは格段の成熟度を誇り、演奏機会もウィーン時代の傑作群に劣らず多い。

モーツァルトにとって、この作品は自信作だったのだろう。1777年から78年にかけてのマンハイム・パリ旅行に携え、また1780年代のウィーンでも何度か演奏している。

曲の愛称となっている〈ジュノム〉の題については、従来フランスのピアノ奏者ジュノム嬢の注文によってこの作品が書かれたためと伝えられてきたが、ジュノム嬢の素性が一切不明であったことから、謎の女性としてさまざまな憶測を呼び起こしてきた。しかし、2003年のミヒャエル・ローレンツの説によれば、ジュノム嬢の正体はモーツァルトの友人であるフランスの舞踏家ジャン・ジョルジュ・ノヴェールの娘、ヴィクトワール・ジュナミーとのことである。そうであれば、後述のように第3楽章にメヌエット

が唐突に挿入されるのは、この舞踏家ノヴェールとなんらかの関連があるのかもしれない。

第1楽章 アレグロ 弦楽器群にオーボエ2本とホルン2本という簡潔なオーケストラの総奏で開始される。通例であれば管弦楽のみによる長い提示部を経たうえで独奏ピアノが登場するところであるが、ここではわずか2小節目で早くも独奏ピアノが姿を見せる。後のベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番、第5番〈皇帝〉に先んじた新機軸といえるだろうか。終盤のカデンツァはモーツァルト自身によるものが2種類残されている。

第2楽章 アンダンティーノ 「弱音器付きで」と指示されたヴァイオリンにより、嘆きの音楽が切々と奏でられる。ここでも2種類のカデンツァが用意される。

第3楽章 ロンド、プレスト 躍動感にあふれ歓喜が爆発する。中盤では突如典雅なメヌエットが挿入され、がらりと楽想が変化する。その後、ロンド主題が回歸して、ふたたび音楽は疾走する。

楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

モーツァルト ピアノ協奏曲 第27番 変ロ長調 K. 595

作曲:1788?~91年/初演:1791年、ウィーン/演奏時間:約32分

死の年を迎えたモーツァルトが完成した最後のピアノ協奏曲

1791年1月、モーツァルトはこの最後のピアノ協奏曲を完成する。同年の12月にモーツァルトはわずか35歳で世を去っている。もっとも成熟した芸術作品がしばしばそうであるように、作品は簡潔な外観を持ちながらも、作曲家晩年特有の諦観にあふれ、淡く柔らかな情趣を際立たせている。

モーツァルトはこの年、旺盛な創作力を発揮している。1月にこのピアノ協奏曲第27番を完成させると、歌劇〈魔笛〉〈皇帝ティートの慈悲〉、クラリネット協奏曲、未完に終わった〈レクイエム〉など、大小さまざまな傑作を書き残した。ピアノ協奏曲第27番は、完成から2か月後の3月、ヤーン邸で開かれたクラリネット奏者ヨーゼフ・ベアの演奏会でモーツァルト自身によって演奏されたのが初演と考えられる（1月にすぐに初演されたという異説もある）。このヤーン邸での演奏会は、モーツァルトが協奏曲の独奏者として公に姿をあらわした最後の機会となった。

第1楽章 アレグロ のびやかな主題で

開始されるが、どこか寂寥とした空気が漂う。アレグロと記されているにもかかわらず、これまでの協奏曲のような陽気さ、活発さは後退し、しみじみとした情感が滲み出ている。作曲者自身によるカデンツァが残されている。

第2楽章 ラルゲット モーツァルト晩年特有の静謐さを湛えたモノローグ風の楽章。ピアノ独奏による物憂げに思案するかのような主題で始まり、柔和なホルンの響きに先導されて、管弦楽の総奏がしなやかに応答する。

第3楽章 アレグロ、ロンド形式 冒頭の軽やかなロンド主題は、ケッヘル番号上で本作に続く歌曲〈春へのあこがれ〉K. 596の旋律と共通する。また、1788年に書かれた弦楽三重奏のためのディヴェルティメント K. 563の終楽章にも、類似した主題を聴くことができる。控えめなオーケストレーションのもとで、独奏と管弦楽の対話が繰り広げられ、清澄な透明感が醸し出される。この楽章にも作曲者自身によるカデンツァが残されている。

楽器編成/フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

モーツァルト 交響曲 第31番 二長調 K. 297 〈パリ〉

作曲:1778年/初演:1778年6月18日、パリ/演奏時間:約17分

華やかで快活な楽想がパリの聴衆を魅了

1778年、22歳となったモーツァルトは、新天地を求めてマンハイムとパリへと旅立つ。当時、パリでは公開演奏会シリーズ、コンセール・スピリチュエルが開催され、人気を博していた。

モーツァルトはコンセール・スピリチュエルの音楽監督であるジョゼフ・ルグロの知遇を得る。ルグロはモーツァルトに新作を依頼し、交響曲第31番二長調〈パリ〉が作曲された。リハーサルは本番前日の一回のみ。立ち会った作曲者は「こんなひどい演奏は今までに聴いたことがない。できればもう一度練習したかったが、もう時間がない」とひどく不安にかられ、もし本番の演奏がうまくいかなければ「第一ヴァイオリンのラ・ウーセ氏から楽器をとりあげて、自分自身が指揮をしよう」とまで決意する。

コンセール・スピリチュエルの楽員たちは本番になると実力を発揮するタイプだったようだ。モーツァルトの心配は杞憂に終わり、演奏会は大成功を収めた。そればかりか、パリの聴衆はモーツァルトの狙いをきわめて正しく汲みとってくれたようだ。

「第1楽章アレグロのまんなか、きつと受けるにちがいないとわかっていたパッセージがありました。そこで聴衆はみんな夢中になって、たいへんな拍手喝采でした。僕はその効果を心得ていたので、最後にもう一度、それを出しておきました」（父レオポルトへの手紙）

当時のパリの聴衆は楽章の途中にもかかわらず、気に入った場所で拍手をして作曲家を称賛していたことになる。この「受けるにちがいない」場所がどこかということについては、諸説があって判然としない。1778年のパリの聴衆とわたしたちがどれほど遠くにいるか、痛感せずにはいられない。

第1楽章 アレグロ・アッサイ モーツァルトはこの曲で初めて交響曲にクラリネットを採用した。管楽器セクションは厚く、華やかである。

第2楽章 アンダンティーノ 再演用にルグロの求めに応じて書き直されたため、8分の6拍子と4分の3拍子の2種類の稿がある。

第3楽章 アレグロ 壮麗なフィナーレ。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

非破壊検査 Presents
大阪定期演奏会

6.30 (月)

モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

作曲：1785年10月～1786年4月／初演：1786年5月1日、ウィーン、ブルク劇場／演奏時間：約4分

自由へ漕ぎだしたウィーン時代、初のイタリア・オペラ。心おどるその序曲

軽やかな音型がわき立ってコンパクトなドラマを築く〈フィガロの結婚〉序曲は、コンサートの幕開けとして私たちの耳になじんでいる。だが228年前のウィーンで鳴り響いたとき、この序曲はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）のたいせつな船出を告げていた。1781年、偏狭なザルツブルクから音楽の都に飛び出した25歳の作曲家は、まずはピアノ演奏によって聴衆と王室の心をつかみ、もう1年後には初のドイツ語オペラの初演をなしとげる。しかしその翌年、王室の直轄たるブルク劇場は、時の皇帝ヨーゼフ2世の方針によって、当時の主流であったイタリア語オペラへと舵を切りはじめた。この転換に乗ってウィーンでモーツァルトが書いた初のイタリア・オペラが、4幕からなる

野心作〈フィガロの結婚〉なのであった。しかもこのオペラは、少なからずスキャンダラスな性格も孕んでいた。フランスの作家ボーマルシェによる原作は、貴族世界を茶化す内容ゆえに本国では上演が禁止されていたが、ウィーンの台本作家ダ・ポンテは、巧みな翻案によって、みごと皇帝のおひざ元で上演にこぎつける。同じくスキャンダラスなボーマルシェの前作〈セビリャの理髪師〉は、パイジェットの付曲（1782年）によってすでに評価を確立させていたものの、「弱りゆく貴族」と「生き生きした市民」の対比をさらに浮き彫りにした〈フィガロ〉の上演は、パトロンの手を離れて自由な活動へと漕ぎ出しつつあった若者にとって、心おどる未知なる前途を象徴していたのである。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1838年には着手、1844年4月／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス（独奏：フェルディナント・ダーヴィット）／演奏時間：約26分

公共性と熱情——最後の協奏曲に聴かれる、作曲家のふたつの顔

古今のヴァイオリン協奏曲のなかでも揺るがぬ人気を保ちつづけるこの作品は、フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809～47）が歩んできたキャリアのなかでも、ひとつの頂点、あるいは総決算というべき位置を占めている。すでに10歳代にして、目の覚めるような楽器法をあやつるメンデルスゾーンだったが、協奏曲のジャンルでも、その魔法のごとき技術にはしだいに磨きがかけられていった。13歳の頃から1837年までに、ピアノを中心として七つほどの協奏曲が書かれ、今日演奏される「作品64」によって、このジャンルでの歩みは完結を迎える。

ただし、華麗にして端正なその旋律も、けっして筆のおもむくまま自然に生まれたのではなかったようだ。最初の着想は少なくとも完成の6年前、1838年にさかのぼる。当時の書簡は（意外なことだが）開始部分をどうしたらよいか思い悩む作曲家の姿を伝えている。実際、完成バージョンを初期のものと比べてみると、長い年月をかけて旋律が丹念に練り上げられていった過程がよくわかる。

そんな試行錯誤を経て、この作品はようやく35歳の折に仕上げられた。初演の場となったゲヴァントハウスは、1835年に指揮者に就任して以来、メンデルスゾーンが私心なき情熱によってオーケストラを育ててきた本拠地だ。公共の音楽にたえず向けられた、その温かくも真摯なまなざしは、音楽そのものにもよく表れている。つまりこの協奏曲では、「全楽章を切れ目なく続ける」手法——すでに交響曲第3番〈スコットランド〉（1829年着想）で開拓されていたもの——によって、全楽章をとおして一つのまとまった緊張感を、演奏者と聴き手が共有できるようになっている。

第1楽章のほぼ中央部分などには「アジタート（激して）」の指示を付された箇所や、知性の統制をふりほどくかのようなソロ・パッセージが聴かれる。作曲家の端正な面にひそむ、激しい熱情にも耳を傾けたい。対照的におだやかな主題による**第2楽章**を経て、最後を閉じるのは祝祭的な**第3楽章**。終わり間近にソロ・ヴァイオリンが昇りつめる最高音（4点ホ音！）が切なく印象的だ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

マーラー

交響曲 第1番 二長調 〈巨人〉

作曲:1884年頃着手、1888年完成(以後1893~99年にわたり改訂)／初演:1889年11月20日、ブダペスト(指揮は作曲家自身)／演奏時間:約53分

古典的ななりゆきの中、うごめく闇の音……そして力わざによる勝利の瞬間

グスタフ・マーラー(1860~1911年)にとって交響曲とは、「私の生のあらゆる内容」に基づき、「使えるかぎりのあらゆる手段を尽くして一つの世界を構築する」ことができる特権的かつ唯一のジャンルである……作曲家はのちにそう語ったらしい。

作曲家の生きた時代に目を向けてみると、進歩と合理性を追求してきた近代社会はいよいよ破綻をあらわにし、それと呼応するかのように、人間精神にひそむ「無意識」の領域が掘り下げられていった。その点からすると、なるほどこの第1番はまだまだ古典的な枠組に忠実であり、全体も、最終的には「勝利」にいたる過程を描く。だがよく耳を澄ませてみると、それまでの西洋音楽がけっして見ることのなかった漆黒の音が、随所から聴こえてくる。光と闇の交錯する、そんなマーラー独自の音響……。「あらゆる」ものが詰まった音の「世界」に、じっくり浸りたい。

第1楽章では、作曲家自身が「自然音」と呼んだおぼろなユートピアの音響につ

づいて、無垢なる自然へと歩みだす若者の姿が描かれる。初期稿に「順風満帆」と記された**第2楽章**でも、自然の中でのびのびと躍動する人間の生命が讃えられている。

緑なす世界は不意に暗転する。初期稿では「座礁!」とメモ書きされていた**第3楽章**では、陽気な民謡のしらべが、わざわざ音の出にくい音域で、不気味に奏でられてゆく。平和な日常に、世界のいわば暗部が突きつけられたのである。中間部、まるで慰めのオアシスのように響くのは、同時期の歌曲〈さすらう若人の歌〉から引用された菩提樹のそよぎだ。

当初は「地獄から天国へ」と題されていた**第4楽章**で人間は、うごめく闇に闘争を挑み、ついに勝利をおさめる。その勝利を告げるのが、合計3回鳴り響くファンファーレであるが、決定的なのが、「天から降ってきたかのごとき転調」による2回目の出現だ。マーラー自身、「幾度となく絶望の深みに堕ちていった後の、輝かしい永続的な勝利」とさえ呼んだこの箇所こそ、第1番を集約する瞬間でもある。

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(バスクラリネット持替)、エスクラリネット、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タムタム)、ハープ、弦五部